

徒然草

ナイル川河畔で国連職員の心のケアを考える

池田明子

総務シニアオフィサー

UN/FAO カイロ地域事務所

私のアパートからはナイル川がよく見える。夜になると観光客を乗せたカラフルなボートが何台も行ったり来たりしている。アラブポップの曲もボートから聞こえることがある。20年ぶりのカイロは交通渋滞がますますひどくなり、人口2300万人の大都市に膨れ上がった。外国人や観光客相手のレストランはおしゃれになり、かなり繁盛してるがサッカーピラミッドへ行く道路脇にはゴミが溢れ出て砂をかぶったレストランには人影もなかった。出勤する朝、毎日、体半分がない男性が地面に座っている。

アラブ地域には当分戻りたくないと言っていたのにFAO国際連合食糧農業機関（本部ローマ）ローマ本部に勤務して一年半後、次のポストのオフィサーが来てしまった。次の赴任地はエジプトのカイロである。以前カイロには何回か観光客として訪れたことがある。そのころは大規模のテロ事件も少なく比較的安全だったと記憶しているが今回はアラブ文化の中心の大都市カイロへの転勤だ。

私が勤務するFAOカイロ地域事務所には職員がおよそ100人ほど勤務しており、アラブ諸国19カ国をカバーしている。カイロ地域事務所の目的は南南協力を推進し、農林水産の知識を増やしつつプロジェクトベースで持続的開発目標SDGsを達成することである。しかしそれ以外にもやらなければならないことが多くあるがその中でも最も優先してやらなければならない仕事がある。それは国連職員の心のケアである。

医者でもカウンセラーでもない私がなぜそんなことを言うかという、実は国連組織として一般的にみると、いままで職員の心のケアの分野を意識してはいたが、効率的に実施してこなかったからである。実は、この問題は非常に重要な問題なのである。国連に勤務するとは華やかに聞こえるが、実際の職場としてはかなり厳しく難しいのが現実である。国連でも毎年さらに紛争や難民やテロが増え気候の変動が激しく狂ってくると、自動的に仕事が増加し、複雑化してくる。その上、国連加盟国193カ国の職員と一緒に働くということは容易なことではない。人間には基本的に好き嫌いがあり、それを乗り越えるのはかなりの努力を必要とされる。さらに日頃の摩擦、些細なことから生じる様々な誤解、優越感、劣等感、差別（性的、習慣、宗教など）などが混じり込んできて毎日が闘いになるのである。

こういった難しさと複雑さが倍になるのは国にもよるがフィールドでの勤務である。私が過去、バグダット、アビジャン、モンロビア、バイルートといったフィールドで約10年ほど勤務してい

た時も、爆弾、人質、放火、暴力、パワハラ、セクハラ、などといった大事件がいくつもあった。私自信これらの大事件をすべて経験した。それに加え、喘息発作、マラリア、そのほかの病気も多く体験した。3年過ごしたリベリアではエボラ出熱という死すれすれの恐ろしい病気が2014年に国全体に広がり、国連の立場としてその病気に対して国民を保護するという仕事の担当にもなった。そしてこういった事件や環境にさらされると、いろいろな反応が職員のなかに出てくる。事件との直接関連した度合いにもよるが長期に病気になったり、障害者になったり、トラウマになったり、なかには職場に復帰できなくなる職員もいた。

エボラ出熱を例にとると、心理的な恐怖感のために多くのリベリア平和維持ミッションの職員が病欠したり、いったん休暇で国を出たら何らかの理由で復帰しないとといったケースが急増した。中には辞任する職員も数人もいた。私は当時そういうケースを個人ベースで記録に残す仕事もしていたが、復帰した職員に対して心のケアをするといった対処も全くなかった。また去年には国連全体組織のためのメンタルヘルスと心のケアのガイドライン「よりよい世界のための健康な労働力」が発表された。そのガイドラインによると、2015年に実施された全国連職員（約1万7千人）を対象にしたアンケート「グローバル ウェルネス サーベイ」の結果を「全職員の半分が心のケアを緊急に必要とする危機的状態である」と報告¹している。ただの病気ではなく心の病気やストレスといったメンタルケアの必要性が組織全体として不可欠であることがわかった。

しかし上に挙げたフィールドでの事件や大問題は国連特にフィールドでは（国にもよるが）日常茶飯事で毎日の出来事なのである。だから毎日が闘いで、サバイバルし、毎日健康に過ごす事、充分の睡眠の確保することが非常に重要になってくる。またメンタルにも強くなってはならず、嫌な事を「健康的に早く忘れる」という癖が身に付いてくる。私の個人的な経験から言うとうとういう事件の時でも一番重要なことは最低のカロリーをとり、しっかり最低6時間睡眠を確保することだった。私は豚肉を食べないが、その他の食べ物にはあまりこだわらない。しかし体が疲れているのに眠れない睡眠不足の時期があり、どうやって質のよい睡眠を確保したらいいのか真剣に悩んだことがある。そのため、いくつか睡眠についての本を読み、その分野の専門家に話を聞き、その結果良く眠れるためのグッズの買い物を世界各国で楽しみ、最終的には自分なりの早くぐっすり眠れる方法を発見した。

危害にあった状態から職員を救助するために、国連はどうやって組織的に活動しているのだろうか？ 国連事務局では国連平和維持活動のミッションにカウンセラーを派遣したり、オンブズマンやエシックス事務所も同時に本部やナイロビ、バンコックなどに設けたり、本部以外にも職員がサービスにアクセスできるよう工夫してきた。しかし実際のフィールドでは勤務地にもよるが危険地帯だとなかなかカウンセラーが勤務したがいなかったり、半年で引き上げたり、人事的な問題があったりと、質の良いサービスをフィールドにいる職員に常に提供するのはいかに難しかったと記憶している。上に書いた心のケアのガイドライン「よりよい世界のための健康な労働

¹A Healthy Workforce for a Better World. United Nations. May, 2018. Page 8.

力」は、単にカウンセラーを派遣するのではなく、これからは組織と職場と同僚が一緒になってサポートするという連帯システムこそ重要だと付け加えている。それを **duty of care** という形で理解し期限付きで実施しなければならなくなった。FAO も今年から本腰をいれて行動計画を作り最終段階までレポートをまとめた。

2012年に FAO カイロ地域事務所にて悲惨な事件があったと聞いた。職員の心の傷が少しでも癒されるよう努力したい。